



手入れの行き届いた境内の庭は色とりどりのツツジで満開。

取材にご協力をいただいた高島さん(左:曹洞宗石川県青年会)と中田さん(右:總持寺祖院事務員)。笑顔のお二人だが、いまま祖院再建に向けて懸命に努力されている



倒壊後、今年の春に完成したばかりの「僧堂」内部(外単)。修行僧は朝夕、ここで坐禅に励む。一般者の坐禅体験も受付けている。



瓦に祈禱を込めて寄進。一枚千円の寄付と寄進された瓦の両方が再建に生かされることになる。

【鐘楼(しょうろう)】

現在、大掛かりな修復作業が行われている「鐘楼」。来年には完成予定である。鐘楼が修復工事のため、釣鐘は山門脇に仮設されている。痛々しい姿に一日も早い再建を願うばかりだ。



門前町

ご紹介



總持寺通り(門前通り)の中ほどに建つ「禪の里交流館」。震災復興に向けて、2007年11月13日に開館した。總持寺の歴史が貴重な資料と共に展示されている。



能登地方だけで栽培されている「のとクリシマツツジ」。花の色は数種あるが、独特の赤がもつとも美しい。峨山禪師が自ら植えたという峨山道沿いのツツジは、別名「がさんクリシマ」と呼ばれている。



取材:小林桂子 撮影:小倉直子

能登・輪島の文化

六百年の技を受け継ぐ「輪島塗」の伝統美

重要無形文化財として、いまや世界にもその名が知られる「輪島塗」。その制作行程は三十以上、ひとつの作品が完成するまでに百以上もの手数を要する。蒔絵や沈金といった緻密な装飾技法に加え、下地づくりや独自の工法で優美にして堅牢な生活用具を生み出した。もともと輪島には漆器づくりに適した原材料が豊富にあったことが始まりだが、伝統の技を支え続けた根本は「良いものを作る」という情熱であろう。(撮影協力:しおやす漆器工房)



加盟している。さらに多くのお店が加わり、能登の味が全国に広がることを期待したい。(撮影協力:すし処伸福朝市丼)



一食即解! 六十三種の「能登丼」の味わい

奥能登ウエルカムプロジェクト推進協議会が進める「能登丼」プロジェクト。食材・食器・調理法など、地元素材にこだわった定義を踏まえ、現在六十三のお店が

しらよね 白米の千枚田
山裾が海に落ち込む急斜面に階段状に作られた棚田。実際には二千枚以上の田んぼがある。小さな田が折り重なって描く幾何学模様は圧巻で、日本海の荒波が山裾を洗う景観が素晴らしい。一面当りの広さは約三畝のため機械が入らず、苗は手で植えられている。

